大伴古麻呂奏言について：虚構説の紹介とその問題点

石井, 正敏 / ISHII, Masatoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

35

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

40

(発行年 / Year)

1983-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011674>

大伴古麻呂奏言について

——虚構説の紹介とその問題点——

石 井 正 敏

はじめに

『続日本紀』天平勝宝六年正月丙寅(三十日)条にみえる次の記事は、日本古代対外関係史上注目すべき史料の一つとして、よく知られている。

副使大伴宿禰古麻呂自唐国至。古麻呂奏曰、大唐天宝十二載、歲在癸巳正月朔癸卯、百官諸蕃朝賀。天子於蓬萊宮含元殿受朝。是日、以我次西畔第二吐蕃下、以新羅使次東畔第一大食国上。古麻呂論曰、自古至今、新羅之朝貢⁽¹⁾因日本国久矣。而今列東畔上、我反在其下、義不合得。時將軍吳懷実見知古麻呂不肯色、即引新羅使、次西畔第二吐蕃下、以日本使次東畔第一大食国上。

すなわち、鑑真らを伴なつて唐より帰国したばかりの遣唐副使大伴古麻呂の帰朝報告で、唐の天宝十二載(日本天平勝宝五年・西

大伴古麻呂奏言について(石井)

暦七五三年)正月元日の唐朝における朝賀に際して、日本使が新羅使の下位に置かれていることを不満とした古麻呂が、「新羅は昔から日本に朝貢している国であるのに、日本よりも上位に置かれているのは理に合わない」と主張して、席次を改めさせたいものである。

この記事は、『日本紀略』や『善隣国宝記』⁽²⁾に引用され、早くから注意を惹いていた。そして『大日本史』⁽³⁾巻百十六大伴古麻呂伝にみえ、同書「阿倍仲麻呂伝贊」に、「大伴古麻呂争坐次、而宣国威。」と記されているのを始め、もっぱら国威の宣揚を物語る格好の史料としてしばしば引用されて今日に至っている。ただし最近の東アジア史論の中では、日本の国際的地位を相対的に示す史料として、別の角度からの評価が出されている。⁽⁴⁾

一方、これが余りにも劇的であるためか、大伴古麻呂の奏言を疑問視する意見がある。これらを今仮に虚構説と称することにす

る。こうした虚構説について、従来内容及んでまで検討されたことはなく、わずかに、近年遣唐使に関する諸問題を精力的に検討されている増村宏氏が論及されているにすぎないといつても過言ではない。かねて筆者もこの問題に関心をもち、関連史料を求めていたが、その中、唐の將軍呉懷実について、玄宗の側近の宦官と推測させる史料に気付いたので、別稿を草した⁽⁶⁾。その時、虚構説についても触れるつもりであったが、紙幅の都合で省略したため、以下に虚構説の紹介かたがた若干の私見を述べてみたいと思ふ。なお、増村氏も他日詳論を展開されることと思われるが、本稿も同氏の論考から多くの教示を得ていることを、あらかじめお断わりしておきたい。

一

大伴古麻呂の奏言を虚構とする見解は、まず韓国の卞麟錫氏が述べておられる。同氏の論点は多岐にわたるが、要約すると次のごとくである。

まず、これまでの研究者は、編纂物である『統日本紀』の特定史観を考慮せず、当該史料を、日本の対外関係上の優位を示す記事として無批判に引用している、と従来の研究者の姿勢について批判し、ついでこの頃の唐・新羅・日本の関係を概観し、唐・新羅関係が緊密であったことを跡付けられている。そしてこれらの検討の結果を踏まえた上で、「古麻呂抗議」の疑問点を挙げている。第一に、唐代に起きた他の外国使争長事件四例をみると、それらは紛争解決のために当該所司によって十分に討議され、さら

に皇帝の裁許を経て円満な解決方法がとられている。ところが、この例は日本側の極端に一方的な勝利で対照的である。そして皇帝の裁許を得ることなく、將軍呉懷実個人の独断によって処置されていることは不審である。つまり、元日の朝賀式典には多くの関係者が総動員されるが、そうした中で呉懷実が独断でこの問題を処理することは不可能である。まして呉懷実は人名辞典等に見出すことができない無名の將軍にすぎず、この点もまた釈然としないところである。このように決定手続きに問題がある上、この時の遣唐使の構成からみても疑問がある。つまり、今回の遣唐使には大使藤原清河をはじめ、唐留学の経験をもつ副使吉備真備らの有識者がおり、その上、唐の官僚として要職についている日本人留学生朝衡(阿倍仲麻呂)らがいるにも拘わらず、あえて副使の古麻呂が奏請していることは、会話(言葉)の上からも、涉外事務担当の面からも疑問が抱かれる。

卞氏は以上のような理由をあげて、古麻呂の抗議には疑問があるとされたのである。

さて、古麻呂の抗議を疑問とする意見は、ついで日本の東洋史学者である鈴木俊氏にみられる⁽⁹⁾。同氏は古麻呂奏言を紹介した後、

……という景気の良い話のみえる。だがこれは日本側の『統日本紀』にある話で中国側の記録にはなく、ここに書かれているほど、唐が日本を認めていたかどうかは疑問である。また倭国と日本の関係が明瞭でなく、倭国伝のほかに日本伝をかかげたり(『旧唐書』)日本伝だけをかかげている(『新唐

書」ことからしても、唐が日本をよく知り、日本を重視していたとはとうてい考えられない。

と、主に中国側に記録がないこと、唐が（新羅よりも）日本を高く評価していたとは思われないこと、等を理由に、古麻呂奏言に疑問を抱かれている。

そして最近にいたり、山尾幸久氏があらためてこの問題をとりに上げ、「人口に膾炙したこの話は、しかしたぶん事実ではないであらう。」とされた。⁽¹⁰⁾その理由は、大体次の四点に要約される。

①『冊府元龜』^{卷九百七十一}外臣部・朝貢四、天宝十二載の条には、

三月、鬪資・謝颺國・埒仁國・黒衣大食並遣使獻方物。牂牁・疎勒・日本等国、渤海並遣使賀正。

六月、日本国遣使来朝。

とあり、古麻呂らの遣唐使の到着は天宝十二載三月及び六月で、席次争いがあったという〔天宝十二載〕正月一日には古麻呂は入朝していない。」

②新羅の遣唐使は、七四八年（天宝七）から七五五年（天宝十四）まで一切みえない。

③七五三年に吐蕃・大食が唐に遣使した史料はなく、まして七四七・八年から七五一・二年頃までの唐と吐蕃・大食などとの戦争の経過をみるならば、一般論としてもありうることはなからう。

④古麻呂の抗議の内容は、七五二年（天平勝宝四年）六月に日本に入朝した新羅王子金泰廉らに対す次のような朝廷の論と揆を一にしている。帰還早々にこの事実を知った古麻呂に

大伴古麻呂奏言について（石井）

よる虚言の可能性も考えうる。

新羅王子金泰廉等拜朝、并貢調。因奏曰、新羅国王言日本照臨天皇朝廷。新羅国者、始自遠朝、世々不絶、舟楫並連、来奉国家。今欲国王親来朝貢進御調。而顧念、一日无主、国政弛乱。是以、遣王子韓阿浪泰廉、代王為首、率使下三百七十余人入朝、兼令貢種々御調。謹以申聞。詔報曰、新羅国始自遠朝、世々不絶、供奉国家。今復遣王子泰廉入朝、兼貢御調。王之勤誠、朕有嘉焉。自今長遠、当加撫存。^略○下

以上の四点を主な論拠として、山尾氏は、「古麻呂の奏上についてはかなり疑問がある」とされたのである。

二

以上、大伴古麻呂の奏言を疑問とする主要な見解を紹介してきた。⁽¹²⁾これらの虚構説は、古麻呂奏言を無批判に利用してきた「わが国の固定した従来の理解に対する一つの異論と評価しなければならぬ」⁽¹³⁾であらう。しかし虚構説を子細に検討していくと、幾つかの疑問点が浮かんでくる。その最も大きなものが、日本・新羅の争長事件の史料を『続日本紀』にのみ求めて問題としていることである。すなわち、その所論の背景には、官撰史書である『続日本紀』にのみみえる記事であるから、編者ら、延いては日本朝廷によって潤色を加えられた可能性があり、一概に信用することはできない、という心理が働いているように思われる。なお虚構説にあつては、古麻呂奏言のどの部分を疑問とされるの

か、つまり奏言自体をあり得ないものとするのか、或は席次変更を疑問とするのかといった点について、今一つ明らかにされていない感じをうける。この点、むすびにおいて再び述べることにする。

さて、この事件については、関連する史料が『東大寺要録』^一に引かれた唐僧思託撰『延暦僧録』勝宝感神聖武皇帝菩薩伝にみえることを注意しなければならないであらう。この史料も著名で、よく引用されているが、煩を厭わず関連部分を示すことにしたい。⁽¹⁵⁾

又^①発使入唐。使至長安。拜朝不弘塵。唐主開元天地大宝聖武^{文神}帝云、彼国有賢主君、觀其使臣、矜揖有異。即加号日本、為有義禮儀君子之国。後元日拜朝賀正。勅命日本使可於新羅使之上。又^②勅命朝衡、領日本使於府庫一切処。遍有、至御披三教殿。初礼君主教殿。御座如常莊飾、九經三史架列、積載厨竈。次至御披老君之教堂。闊少高頭。御座莊嚴少勝、厨別竈函、盈滿四子太玄。後至御披釈典殿。〔殿〕宇頭教、嚴麗殊絶。竈函皆以雜宝厨填。檀沈異香。莊校御座、高広倍勝於前。以雜宝而為燭台。々下有巨鼈、戴以蓬萊、山上列仙宮靈宇、戴宝樹、地慧々紅、頗梨宝莊飾、樹花中一々花、各有一宝珠。地皆砌以文玉。其殿諸雜木、尽鉈沈香。御座及案經架宝莊飾、尽諸工巧。皇帝又^③勅、模取有義禮儀君子使臣大使副使影於蕃藏中、以記送遣、大使藤原清河拜特進、副使大伴宿禰胡万拜銀青光祿大夫光祿卿、副使吉備朝臣真備拜銀青光祿大夫秘書監、及衛尉卿朝衡等致設也。開元皇帝御製詩、

送日本使五言。日下非殊俗、天中嘉会期、余余懇義遠、矜爾畏途遠。漲海寬秋月、帰帆駛夕颺。因聲彼君子、王化遠昭昭。^④特差鴻臚大卿蔣桃碗、送至揚州看取、發別牒淮南、勅使魏方進、如法供給送遣。

ここに、元日の朝賀に際し、勅命で日本使を新羅使の上において、とみえ、これが『続日本紀』の古麻呂奏言と対応するものとみなされるのである。ただし、この記事をも思託の創作とする意見があるので、一応この記事について検討しておきたい。⁽¹⁶⁾

右に引いた『延暦僧録』の藤原清河ら遣唐使一行に関する記事は、大体七項目から成り立っている。

①玄宗皇帝が日本使節の態度に感心して、日本に人有義禮儀君子ノ国と加号したこと。

②元日の朝賀に、勅命によって日本使を新羅使の上位においたこと。

③朝衡(阿倍仲麻呂)に命じて、遣唐使に府庫などを見学させたこと。

④遣唐大使・副使らの影像を作成させたこと。

⑤大使・副使らに官位を賜わったこと。

⑥玄宗皇帝が「送日本使」の御製詩を賜わったこと。

⑦遣唐使の帰国に際し、特に鴻臚大卿蔣桃碗を遣わして、帰国事務を監督させたこと。

等である。これらの記事は、拜朝から帰国まで時間的な経過を追って記述しているとみて不自然なところはない。そして②の記事は今回の遣唐使一行の動静に関する叙述の一部にすぎないのであ

り、一連の記事全体を虚構とするならばともかく、㊸の部分を上り上げて創作とするには問題があろう。

ところで、『延暦僧録』は現在完全な形では伝わらず、『日本高僧伝要文抄』などに引かれた逸文によって、その内容の一部分が知られるに過ぎない。⁽¹⁷⁾したがって成立時期などについて不明の点も少なくないが、鑑真に随つて来日した弟子の一人である唐僧思託によって、延暦七年(七八八年)頃に著わされたものとされている。とすれば、『続日本紀』撰進(延暦十六年八七九七)以前の成立となり、思託は『続日本紀』によって前掲㊸を記述したのではないということにならう。

それでは、思託が㊸の他に『続日本紀』にもみえない遣唐使一行に関する詳しい行動を記録することができた理由はどこにあったのであろうか。思託には『延暦僧録』の他、師鑑真の伝記『大唐伝戒師僧名伝記』(『鑑真和上広伝』)の著作があり、さらに同書を始めとする史料を提供して、淡海三船に鑑真の伝記執筆を依頼し、三船の手によって成ったものが『唐大和上東征伝』である。

これらによって、思託が鑑真に最も近い弟子の一人として、様々な記録をとっていたことは容易に理解されよう。また鑑真一行の来日に至る経過をみると、天平勝宝五年(天宝十二載)十月、鑑真は、藤原清河・大伴古麻呂らの要請に応じて六度目の渡海を決意し、弟子とともに遣唐使船三隻に分乗した。ところが鑑真ら渡航の話聞いた唐の官憲の追及を恐れた大使清河は鑑真らを下船させてしまった。この処置に憤慨したのが大伴古麻呂で、彼は清河に内緒で鑑真一行を自分の船に收容して日本に向けて出帆し

た。その後、人員の割り振りが行なわれたらしいが、思託は鑑真とともに古麻呂の船に同乗したまま、天平勝宝六年正月に日本に到着したのである。なお、大使藤原清河・阿倍仲麻呂らの乗る一船は途中で遭難し、安南漂着を経て、再び唐に戻り、結局日本に帰らなかったことはよく知られている。このように、鑑真の側近にいた思託は、清河らが鑑真に面会を求め、渡日を要請する時から、日本に到るまで、常に遣唐使一行と親しく言葉を交す機会があったのであり、彼らの唐朝廷における行動をはじめ、親しく見聞したことを、こまめに記録していたものと推測される。そしてそれらの史料を利用してできたものが、『延暦僧録』以下の著書であったわけである。⁽¹⁹⁾

ところで、『延暦僧録』について、同書は「唐僧の撰述ではあるが、それは内容からいって日本史籍である。『延暦僧録』の記載の考察には、渡來僧思託の日本滞留三十余年の年月のことと共に、その日本史籍であることを考慮しておく必要があるであろう。」⁽²⁰⁾という意見がある。渡來後三十余年を経てのされた著書であるから、うのみにはできないこと、或は日本に迎合的な記述があるかも知れないから注意せよ、ということでもあろうか。それでは、前引の遣唐使関係記事は、渡來後三十余年を経た延暦年間⁽²¹⁾の知識によって書かれたものか、それとも当時の史料が利用されているのであろうか。『延暦僧録』の当該記事の信憑性にも関わる問題であるが、検討する素材の一つとして、玄宗皇帝の称号についてとり上げてみたい。

現在見ることが出来る『延暦僧録』逸文の中には、玄宗の称号

について、前掲記事の④にみえる「開元天地大宝聖文武道皇帝」及び⑤にみえる「開元皇帝」の他に、『日本高僧伝要文抄』所引『延暦僧録』思託伝に、「以玄宗至道大聖大明孝皇帝勅、預參玄。」とある。この文は、思託が玄宗の勅によって出家したことを述べている部分である。これらの称号を『唐会要』（殿本）^一卷帝号上・玄宗の条に徴してみると次のごとくである。

八載閏六月五日、又加尊号開元天地大宝聖文武道皇帝。

十二載十二月七日、又加尊号開元天地大宝聖文武孝徳証道

皇帝。^{○中}元年建巳月五日、崩神龍殿。^{年七}十八。応徳元年三月辛

酉、葬泰陵。^略○中諡曰至道大聖大明孝皇帝、廟号元宗。

これによれば、『延暦僧録』の「開元天地聖文武道皇帝」は正しくは「開元天地大宝聖文武道皇帝」で、天宝八載閏六月から同十二載十二月に至る間に用いられた尊号であり、まさに藤原清河ら遣唐使一行の在唐中にかかる尊号であった。一方の「至道大聖大明孝皇帝」は崩後の諡号であり、「玄宗」は廟号である。つまり、思託が宝応元年（七六二）に没した玄宗の諡号・廟号を知っていたことは間違いない。それにも拘わらず天宝十二載当時の尊号を記していることから、この遣唐使関係記事が、（思託の書き留めておいた）当時の記録に基づいて書かれたとみてよいのはあるまいか。わずが一例を以て即断することは危険であるが、一つの傍証とすることはできるであろう。

三

以上、これまでの虚構説では殆んど注意されていなかった『延

暦僧録』の記事について検討を加えてきた。その結果、「日本使を新羅使の上位におくべきことを命じた」という記事は、同時期の史料に基づいて記されたと推測され、その内容も信頼できるものと思われる。そこで『延暦僧録』の記事を含めて虚構説について考えてみると、まず卞氏の疑問の中、古麻呂奏言の内容は『続日本紀』だけでなく、同内容の記事は『延暦僧録』にもみえること、第二に、皇帝の裁許を得ることなく將軍呉懷実個人の独断によって処置されている、という点は、『延暦僧録』に「勅命」とみえること^①、第三に、呉懷実は無名の將軍にすぎない、という点は、別稿で指摘したように、呉懷実が玄宗の側近の宦官とみなされること、等をもって反論することができよう。

つぎに鈴木俊氏の説については、中国側の史料にみえないことを疑問とされているが、『延暦僧録』の記事は、唐僧思託が在唐中の史料に基づいて記したとみなされる点を考慮する必要がある。

そして山尾氏説については、四つの疑問点のうち、①については後述することにして、②③つまりこの頃新羅・吐蕃・大食の唐への入朝を示す史料はない、という問題については、たしかに基本的な指摘であるが、そのためには、外国使少なくとも前記三国使の入朝記事が全て現存の史料に記録されていること、或は全く脱漏がないことを証明した上でなければ、絶対的な理由とはなし得ない。しかしそれは不可能であろう。つまり卞氏が述べているように、その頃の唐・新羅の緊密な関係からみて、約六年間にわたって新羅の遣唐使派遣がなかったとは考えられず、中断の理由

も見当らない。また大食についていえば、山尾氏が中断期間とされた頃にも「黒衣大食」(アツパース朝)の入唐記事が散見しており、現に日本使の入唐を記す前引『冊府元龜』朝貢三の天宝十二載三月条にもみえてゐる。古麻呂が彼らを単に大食と呼んだとしても不思議ではないであらう。吐蕃使について徴証はないが、やはり史料の残り方を考慮すべきではあるまいか。④では日本朝廷が「新羅国始自遠朝、世々不絶、供奉国家。」と述べていることとの類似を指摘され、それに基づく古麻呂の虚言ではないかとされているのであるが、いささか飛躍があるように思われる。

最後に、虚構説の論拠の中で最も基本的な指摘である、山尾氏説の①、つまり大伴古麻呂らは天宝十二載正月には入朝していなかった、いう点について考えてみたい。

天平勝宝二年に任命された藤原清河を大使とする遣唐使は、同四年三月三日に拜朝し、閏三月九日に節刀を授与されて(以上『統日本紀』)、間もなく難波から入唐の途についたものと思われる。そして、この遣唐使に関して次にあらわれる史料が、前掲『冊府元龜』天宝十二載三月条・六月条の記事である。

さて、これまでもこの記事には注意されてきたが、ここに「三月」とあるのを、『統日本紀』の当該記事及び文中に「賀正」とあることから、「三月」は「正月」の誤りとする意見がある。しかし『冊府元龜』外臣部・朝貢、褒異等の項を一览すれば、「某国遣使賀正」記事が正月以外にみえることが少なくなく、一例を示すと、同書外臣部・朝貢四に、

十四載四月、新羅、突騎施並遣使賀正。

大伴古麻呂奏言について(石井)

とあり、「賀正」とあるからといって、直ちに「正月」に係けるべきものとするには問題がある。

一方、『冊府元龜』以外の中国側史料をみると、『旧唐書』^{卷百九}東夷伝・日本国の条に、

天宝十二年、又遣使貢。

とあり、『新唐書』^{卷三百}東夷伝・日本の条に、

天宝十二載、朝衡復入朝。

とみえる。『新唐書』の「朝衡」は誤りであるが、ともかく両唐書ともに天宝十二載としている。また『宋史』^{卷四百}九十一外国伝・日本国の条には、有名な齋然の「王年代紀」が引かれているが、これには、

次孝明天皇、^(善)聖武天皇之女也。天平勝宝四年、当天宝中、遣使及僧入唐、求内外経教及伝戒。

とある。ここで注意されるのは、他の例では、例えば、

宝龜二年、遣僧正玄奘入朝。当開元四年。

のように、日本年号に相当する唐年号が注記されている。ところが、前掲記事には単に「当天宝中」とされて、相当する年次天宝十一載は書かれていない。このことは、日本の記録では天平勝宝四年入唐となっているものが、中国側の史料ではそれに合わないため、敢えて「当天宝中」と表記したのではなからうか。もしそうであるとすれば、中国側の所伝では両唐書のように「天宝十二載入唐」となっていたことを推測させる。

翻つて、日本側の史料では、今回の遣唐使が天平勝宝四年に入唐したことを伝えているが、次のような例もある。『統日本紀』

宝龜十年二月乙亥(四日)条に、

贈故入唐大使從三位藤原朝臣清河從二位。副使從五位上小野朝臣石根從四位下。清河贈太政大臣房前之第四子也。勝宝五年、(補注)爲大使入唐。廻日遭逆風、漂着唐国南辺驩州。時遇土人反、合船被害。清河僅以身免、遂留唐国、不得帰朝。於後十余年、薨於唐国。石根大宰大貳從四位下老之子也。宝龜八年、任副使入唐。事畢而帰、海中船断。石根及唐送使趙宝英等六十三人、同時没死。故並有此贈也。

とある。小野石根の入唐は宝龜八年、唐より帰途についたのが翌九年のことである。(26)もし藤原清河についても同様に記述されたとするならば、清河の入唐を天平勝宝五年とする記録もあったことになる。しかしこの場合恐らくそうではなく、清河が帰国の途中遭難し、再び唐に戻ったまま遂に日本へは帰らなかったというところに重点をおいた記事と理解すべきであろう。この他、僧行賀の寂(伝)にも入唐を天平勝宝五年と思わせる記述があるが、僧伝の年幾才、在唐何年といった類の記述には、往々にして不正確なものがあり、この例を採ることはできないであろう。

以上のように、『冊府元龜』以外の中国側史料にも天宝十二載入唐とみえること、また日本側史料にも天平勝宝五年入唐と解しうる史料があり、これらは山尾氏の指摘を支持する史料といえよう。しかし、問題とする『冊府元龜』の記事に、果たして全幅の信頼をおけるのかということになると、いささか疑問がある。同書外臣部についてみても、係年の明らかな誤り、それも後世の刊誤・写誤ではなく、編纂当初からの誤りを指摘することができ、(28)

恐らく子細に検討すれば、月日の係け方においても見出すことができるであろう。また天宝十二載三月条・六月条の記事を間違いないとする場合も、果たしてそれが何時の時点、つまり日本を含む外国使節の到着・拜朝・帰国・その他、何れの時について係けられているかを吟味しなければなるまい。(29)例えば、同書外臣部・朝貢四・開元二十二年条に、

四月、略中新羅王與光遣其大臣金端竭丹来賀正。先時與光遣其姪志廉謝恩、献小馬兩匹・狗三頭・金五百兩・銀二千兩・布六十四・牛黃二十兩・人參二百斤・頭髮一百兩・海豹皮一十六張。及是授志廉鴻臚少卿員外置。

とあり、これによると、金端竭丹の入朝は四月のこととみなされるであろう。しかし、同書外臣部・褒異三・開元二十二年条には、正月壬子、新羅王與光大臣金端竭丹来賀正。帝於内殿宴之。授衛尉少卿員外、賜緋襪袍平浸銀帶及絹六十四、放還蕃。

とある。但し、この年の正月に壬子はなく、四月では二十日にあたる。したがって干支または係月の何れかに誤りがあるとみられる。この記事が三月乙酉条の前にあることからみて、干支の誤りである可能性が高いが、本来四月壬子とあったものを、誤って正月にかけたことも否定できないであろう。また次のような例もある。『冊府元龜』卷九百外臣部・朝貢四・開元十四年の条に、

正月、突厥遣其大臣臨河達干康思踪来朝。

五月、略中突厥遣其大臣臨河達干康思踪来朝。

と、正月と五月に同文の記事がある。そして同書卷九百外臣部・褒異三・開元十四年条には、

十四年正月壬午。^(三二)突厥遣其大臣臨河達^(三三)康思琮來朝。授將軍
放還蕃。

とみえる。これによれば、朝貢項の五月の記事は、正を五と間違えた同事重出、正月來朝・五月掃國、等々色々な推測が可能であるが、決め手はない。これらを参考にすると『冊府元龜』の問題の記事も、直ちに天寶十二載三月來朝、としてよいかどうか検討の余地が残されていることが分かるであろう。

このようにみてくると、虚構説の論拠の中で最も具体的に示された史料である『冊府元龜』の遣唐使入朝記事は、必ずしも絶対的な理由には成り得ないと思われる。翻つて思うに、この席次争いの顛末を語る大伴古麻呂の奏言の中で、最も重要な論点は何であろうか。いうまでもなく、それは新羅使との席次争い、特に日本使が新羅使よりも上位に置かれたという点にあり、決して正月朔日という日時にあったわけではないであろう。つまり、古麻呂は、たとえ三月にせよ六月にせよ、実際に唐に渡つた時の話として語つても一向にさしつかえないわけである。一体、古麻呂の虚言とする場合、古麻呂は単に報告者に過ぎず、古麻呂によつて虚構が考案されたとは常識的にいって考えられない。この時の遣唐使―少なくとも要職者―が口裏を合わせておかなければとうてい成立し得ないし、まして到着年月に至つては使節全員が知つていゝるわけである。このような点を含めて考えると、『冊府元龜』の記事を、日本使到着を示す絶対的な史料とみなして、古麻呂の奏言を虚言とするには疑問が抱かれる。さらに言えば、『続日本紀』『延暦僧録』等の日本側史料から『冊府元龜』その他中国

側史料の誤脱を考えもよいのではあるまいか。すなわち『冊府元龜』の記録は貴重であるが、不備を想定できないほどの記録ではない。⁽³¹⁾『冊府元龜』の記載の在り方は、直ちに日本史籍の記録を排除するほどに扱かうことはできない⁽³²⁾であろう。なお、『冊府元龜』⁽³³⁾卷百帝王部・朝会一・天寶十二載条には、十二載正月癸卯朔。帝御含元殿、受朝賀。とあり、天寶十二載正月朔日の朝賀式典は、古麻呂の奏言のごとく含元殿⁽³²⁾で行なわれている。

むすび

以上、『続日本紀』天平勝宝六年正月丙寅条にみえる大伴古麻呂奏言を疑問とする説についてみてきた。それら虚構説の論拠は多岐にわたるが、結局通説と虚構説との基本的な相違は、大伴古麻呂の主張を唐が認めたか否かの問題に帰結すると思われる。すなわち、古麻呂奏言の内容は次の四点から構成されている。

(一)玄宗が含元殿において百官諸蕃の朝賀を受けたこと。

(二)当初の外国使節の席次順は、東班第一新羅・第二大食、西班第一吐蕃・第二日本であったこと。

(三)古麻呂が新羅は昔から日本に朝貢している国であるのに、上位にあるのは理に合わない、と主張したこと。

(四)唐の将軍呉懷実が、古麻呂の納得しない様子を見て、席次を、東班第一日本・第二大食、西班第一吐蕃・第二新羅、に変更したこと。

等である、そして記事の全てを認めた上、(四)は(三)の結果つまり

「唐が日本の主張を正当と認めて席次を変更した」とするのが通説で、逆に「唐が(三)のような日本の主張を認めるのはではないから、(四)の席次の変更などあり得ない」としたり、古麻呂奏言の全体を疑うのが虚構説であるといえよう。筆者は上來述べてきたところによって、虚構説に従うことはできず、(一)(二)を始め、(三)のように古麻呂が主張したこと。そして(四)のごとく席次が変更されたことは史実と考える。その意味では通説に近いが、異なるのは、古麻呂の奏言の内容から、席次変更の理由を、唐が日本の主張を認めた結果、と解釈してよいか疑問に思っているところである。つまり卞氏が述べておられるように、新羅と日本の対唐関係について考えてみると八世紀を対象とした場合、新羅がほとんど毎年、年よっては数回も遣唐使を派遣しているのに比べ、日本は今回の使節を含めて、わずかに四回しか派遣しておらず、いかに地理的な条件を考慮しても、その対唐緊密度の差は歴然としている。これを敢えて無視した形の席次変更が行なわれていることには、多分誰しもが不審を抱くであろう。八時ニ將軍具懷実、古麻呂ガ背ハザル色ヲ見知シテV云々とあるのは、唐側が容易には変更を認めなかったこと、或は事を荒立ないためのその場しのぎの処置に過ぎなかった様子を、はからずも物語っているように思える。これまでこのような事情を考慮せず、唐が日本の主張―日本は新羅の宗主国であるという―を認めて席次を変更した、と即断していたところに、疑問説がでてくる余地があったのではあるまいか。⁽³³⁾山尾氏が前掲のような疑問点をあげられた後、「このように見てくると古麻呂の奏上についてはかなり疑問があるのであつ

て、新羅藩屏国視が唐にも通用する客観的実体があったとする重大な論説のほとんど唯一の根拠がこの記事なのであるから、最小限度上文に示したような疑問については事実の裏付けを取る配慮が必要だと思う。」と述べておられる。前述のように古麻呂奏言の存在を疑う氏説には従えないが、この指摘は重要である。すなわち、唐が席次を変更した理由については、古麻呂奏言とは別に検討すべき課題であると思う。それには、古麻呂奏言を論拠として、日本の認識・論理を追求するだけではなく、唐は外国(使節)の序列を何に基づいて決めたのか、といった点について明らかにする必要がある。今後このような外交儀礼については、『大唐開元礼』などを参考に検討していきたいと考えている。

注

(1) 「新訂増補国史大系」所収本による。但し、同本が、「新羅之朝貢[大日本国久矣]と、『日本紀略』から「大」字を補なっているのは疑問があり、後人の補入とみて削除すべきであろう。鈴木靖民氏「奈良時代における対外意識」(『日本史籍論集』上巻・一九六九年)一六六頁、参照。

(2) 但し、『善隣国宝記』の著者瑞溪周鳳は、この記事を直接『統日本紀』から引用したのではなく、元永元年(一一一八)に外交上の先例を調べた明法博士らの勘例に引かれたものを、さらに引載したものである。拙稿「唐の『將軍具懷実』について」(『日本歴史』四〇二号・一九八一年)参照。

(3) もっとも本居宣長は「たとひ一の位にまれ、新羅の使な

ど、ひとしなみにあへしらへしは、皇朝の大御使には、猶いとあかぬわざなりかし」(『駭戎概言』上巻)といかにも宜長らしい見解を述べている。なお、増村宏氏「唐の玄宗の詩『送日本使』について—関係文献とその理解—(完結)」(『鹿兒島経大論集』二二巻一號・一九八一年、以下増村氏A論文とする)に、古麻呂奏言についての主要な意見が紹介されている(八五、八八頁)。

(4) 坂元義種氏「古代東アジアの国際関係—和親・封冊・使節よりみたる—(下)」(『ヒストリア』五〇・一九六八年、のち『古代東アジアの日本と朝鮮』(一九七八年)に収む)四七頁、鈴木靖氏前掲論文・一六五、九頁、等参照。

(5) 増村氏前掲A論文、及び「旧新両唐書日本伝の検討」(『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』・一九七八年、以下B論文とする)四九〇、二頁。特にA論文では、後述する『東大寺要録』所引『延暦僧録』について、諸写本の調査をはじめ、詳細に検討されている。しかし本稿で問題とする古麻呂奏言の虚構説については、紙幅の都合で省かれ、一部言及されるに止まっていることは残念である。

(6) 前注(2)所掲拙稿。

(7) 下鱗錫氏「中国唐代与新羅の関係—兼論統日本紀所載の『古麻呂抗議』」(『大陸雜誌』三二巻九期・一九六六年)において簡単に触れられ、ついで「唐代外国使争長の研究—『統日本紀』所載の所謂古麻呂抗議の対峙」(『亜細亜研究』一〇巻四号・一九六七年)で詳論を展開された。ここでは主に後者の論文によってみていく。

(8) 下氏が挙げられた四例は次のごとくである。

大伴古麻呂奏言について(石井)

(一) 『旧唐書』卷一百九突厥下・蘇祿条

(開元) 十八年蘇祿使至京師。玄宗御丹鳳樓設宴。突厥先遣使入朝、是日亦來預宴、与蘇祿使争長。突厥使曰突騎施困小、本是突厥之臣、不宜居上。蘇祿使曰、今日此宴乃為我設、不合居下。於是、中書門下及寮議、遂於東西幕下兩処分坐、突厥使在東、突騎使在西。宴訖、厚饗而遣之。

○この他、『新唐書』卷二百突厥伝・『資治通鑑』卷二百開元十八年条、等にもみえる。

(二) 『旧唐書』卷一百迴紇伝

乾元元年五月壬申朔、迴紇使多亥阿波八十人・黑衣大食酋長闍之等六人並朝見。至閤門争長。通事舍人乃分為左右、從東西門並入。

○この他、『旧唐書』卷一百外臣部・朝貢四、等にもみえる。なお、※印以下の箇所は『旧唐書』本紀には「詔其使合從左右門入。」とある。増村氏A論文、九九頁、参照。

(三) 『新唐書』卷二百回鶻伝

永泰初、懷恩反。誘回鶻・吐蕃入寇。俄而懷恩死。(回鶻・吐蕃) 略下

○但し、この例は、他の例とは若干異なり、僕固懷恩死後の「指導権を争った」といった意味であろう(佐口透氏他『騎馬民族史』2(一九七二年)・三八九、三九一頁、参照)。

(四) 『東文選』卷三表箋

謝不許北国居上表

臣某言、臣得当蕃宿衛院状報、去乾寧四年七月内、渤海賀正王子大封高進狀、請許渤海居新羅之上。伏奉勅旨、国名先後、比不因強弱而稱、朝制等威、今豈以盛衰而改。宜仍旧貫、准此宣示者。〇下

〇下氏は『増補文献備考』を参照されているが、ここではその典拠となる史料を示しておく。なお、この新羅・渤海の争長事件については、浜田耕策氏「唐朝における渤海と新羅の争長事件」(『古代東アジア論集』下巻・一九七八年)参照。

(9) 鈴木俊氏「八世紀のアジア」(『八世紀 日本と世界の歴史』・一九七〇年)二四五頁。

(10) 山尾幸久氏「百濟三書と日本書紀」(『朝鮮史研究会論文集』一五集・一九七八年)三二一―三頁。

(11) 以下、本稿で引用する『冊府元龜』は、外臣部については静嘉堂文庫蔵宋刊本(東京大学東洋史研究室架蔵焼付写真による)により、その他は流布本(明崇禎刊本)によった。

(12) この他、「此事については或は古麻呂が功を己れ一人に帰して奏言したのではあるまいかといふ疑を挾まれぬでもない。清河も同じく其場にゐたのであるから、争うたとすれば、共に之を論じたと見るべきものであろう、古麻呂一人にこの功を独占せしむるは如何であらうか。」という意見もある(辻善之助氏「遣唐使と国民元氣の萎縮」(『海外交通史話』一九一七年、増訂版一九三〇年)八五頁)。

(13) 増村氏B論文・四九一頁。

(14) この点については早くから注意されており、例えば森克己氏は、古麻呂奏言を紹介した後、(続紀・東大寺要録

一所引「延暦僧録」)と出典を併記されている(『遣唐使』一九五五年・八〇頁)。

(15) 『東大寺要録』の刊本には、筒井英俊氏校訂本(一九四四年)があるが、引用本文については、増村氏の校訂文により、適宜醍醐寺本(焼付写真による)を参照した。なお前掲拙稿では、「復元日拜朝賀正」と引いたが、醍醐寺本を再検討した結果、増村氏説にしたがい「後元日拜朝賀正」と訂正しておきたい。なお、「可於新羅使之上」の箇所を、本文所引記事を含む『日本高僧伝要文抄』の増村氏のいわゆる「水戸藩書写系統本」では「可居於新使之上」に作っている。この点について増村氏は、「解釈の仕方によっては、考察に相違が生ずるのであろう。『可』は許可の意味であり、この文字を『居』字の誤りとすることもできない。」と述べておられる。しかし『広韻』に「於、居也」とあり、「可於新羅使之上」とは「可居新羅使之上」と同義と解釈してよいであらう。

(16) 鈴木治氏「白村江―敗戦始末記と薬師寺の謎」(一九七二年)一七二頁、参照。

(17) 『延暦僧録』及び思託については、蔵中進氏『唐大和上東征伝の研究』(一九七六年)第四章第五節、飯田瑞穂氏『上宮皇太子菩薩伝』について(『中央大学文学部V紀要』史学第二十七号・一九八二年)等参照。

(18) 鑑真の渡日の経過については、安藤更生氏『鑑真大和上伝の研究』(一九六〇年)、同『鑑真』(人物叢書・一九六七年)等、参照。

(19) 増村氏も、『延暦僧録』の遣唐使「『関係記事』は遣唐使人からの伝聞、または関係資料の採録である」と述べておられる(A論文・八二頁)。

(20) 増村氏「唐の玄宗の詩『送日本使』について—関係文献とその理解—」(『鹿兒島経大論集』二〇巻四号・一九八〇年)九六頁。また鈴木治氏も同趣旨の意見を述べておられる(前掲書・一七二頁)。

(21) なお、注(7)に記した下氏のあげられた唐代争長事例の第二例には、『旧唐書』に「通事舍人乃分為左右、從東西門並入」とあり、通事舍人が独断で処理したようにみえるが、『旧唐書』肅宗本紀には「詔其使合從左右門入」となっていて、最終的には皇帝の勅裁によったことが分かる。呉懷実の場合も同様に考えるべきであろう。

(22) 『旧唐書』^{卷百九}大食伝に、「自阿蒲羅拔後、改為黑衣大食」とみえ、ウマイヤ朝の「白衣大食」に対して、新興のアッバース朝を「黑衣大食」と呼んだ。

(23) 『万葉集』^{卷十}に関連する史料がある。山崎鑿氏「四つの船—古代外交裏面史の哀歎—」(『万葉集研究』九集・一九八〇年)参照。

(24) 杉本直治郎氏『阿倍仲麻呂伝研究』(一九四〇年)三四九頁。

(25) 杉本直治郎氏前掲書・四三七頁以下参照。

(26) 『続日本紀』宝龜九年十一月乙卯条、参照。

(27) 『類聚国史』^{卷百四}撰書・延暦二十二年三月己未条に、「大僧都伝灯大法師位行賀卒。春秋七十有五也。」^略〇中生年十五出家也。廿受具足戒、廿五被宛入唐留学。」とみえ、享年七十五才から換算すると、入唐は天平勝宝五年となる。『本朝高僧伝』は「天平勝宝五年、承勅入唐。」としている。なお松本文三郎氏は、文中の「廿五」を法臘と解し、宝龜四年入唐説を述べておられるが(『靈仙入唐年代考』(『仏教芸術とその人物』一九二二年)、従い難い。

(28) 例えば、封冊二・開元二十年条に「是年、渤海柱妻郡王大武芸病死、其子大欽茂嗣立。帝降書冊且弔之。」^略〇下

とあるが、武芸が死に、欽茂が嗣立したのは、『旧唐書』など諸書によって開元二十五年もしくは二十六年のことである。また、喪異三・天宝二年条に、

十二月乙巳、新羅王遣弟来賀正。授左清道率府員外長史、賜綠袍銀帶、放還蕃。

とある。しかし同年十二月は癸未朔で、同月内に乙巳はない。一方、朝貢四・天宝三年条に、

十二月、新羅王遣弟来賀正。

とみえる。本年十二月は甲申朔で、十六日が乙巳にあたる。そして『唐会要』^{卷九}新羅伝に、

天宝三載、^略是載、^略十月遣使来賀正。授左清道率府員外長史、賜綠袍銀帶、放還蕃。

とあるのを参照すると、喪異三の記事は、干支に誤りがあるのではなく、朝貢四の記事に対応し、正しくは天宝三年にかかる記事とすべきであろう。なお、朝鮮史編修会編『朝鮮史』第二編(一九三二年)では、新羅景德王三年(天宝三載)十二月のこととされている(一五八頁)。

(29) 杉本直治郎氏は六月条を、「清河等が長安を辞して帰途に着く時、恐らく暇乞のため参朝したこと」とされている(前掲書・四五七頁)。

(30) なお、金端竭丹については、『文苑英華』^{卷四百}七十一番書四・新羅書「勅新羅王金興光書」第一首(『曲江集』にも収める)にみえる。末松保和氏「新羅の郡県制、特にその完成期の二三の問題」(『学習院大学文学部研究年報』二

一輯・一九七五年）参照。

(31) 増村氏A論文・一〇五頁。

(32) 含元殿は大明宮の正殿である。大明宮は初め永安宮とい

い、その後次のように名称が変遷している。貞観八年・永安宮↓貞観九年・大明宮↓龍朔二年・蓬萊宮↓咸亨元年・含元宮↓神竜元年以降・大明宮。したがって天寶十二載当時は大明宮含元殿でなければならぬが、古麻呂奏言には「蓬萊宮含元殿」とある。これはこの頃の日本では蓬萊宮が通称となっていたためであろう。なお小野勝年氏「長安の大明宮」(『仏教芸術』五一号・一九六三年)・佐藤武敏氏「長安」(一九七一年)等、参照。

(33) この点について、すでに鈴木靖民氏が、「これは人口に膾炙している事件であるが、古麻呂の論じた、新羅が日本に朝貢することの久しい国であるという点の当否については、従来ほとんど考察がなされていないようである。」として、古麻呂の主張の妥当性について検討され、

「少なくとも現象面よりすれば、大伴古麻呂の強弁した日羅の關係は、あながち不条理として唐朝では排除できなかったのではあるまいか。」と述べておられる(前掲論文・一六五―一六九頁)。氏の論証方法をさらに敷衍して、唐側の論理を明らかにする必要がある。

(34) 山尾氏前掲論文・三三頁。

(補注) この箇所を国史大系本は「時遇土人、及合船被害」とするが、引用文のように改めるべきこと、増村氏「遣唐大使藤原清河の抑留」(『鹿大史学』二八号・一九八〇年)五六頁、参照。

五六頁、参照。

(付記) 本文で山尾氏説に論及したが、同氏は近刊の『東アジア

の日本古代史講座 6』(一九八二年)所収「遣唐使」において、自説を補強して再論されているので、是非参照されたい。筆者が同書を手した時は、すでに本稿が印刷に付されていたため、ここに付記するに止めざるを得ない。山尾氏並に読者の御海容を乞う次第である。